

2月19日(木) ディスカッション

担当 芹澤 隆道

この日は今までの6日間を振り返り、これから4日間は何を意識してワークを続けていくのか、をキャンパーみんなで話し合うディスカッションがありました。この日 OD だった僕は、さくらとバネッサとこのディスカッションの進行役をつとめました。

僕は、みんなよりも4日遅れて2月18日にトンコ村に着いたのですが、着いたその日に、サムソンの妹のサブリーナと姪のバシンから「ワークキャンパーたちは怖い顔をしていて、なかなかわたしたちに話しかけてくれない」ということを聞きました。英語をうまく話せないアエタとタガログ語をちょっとかじっただけの日本人ワークキャンパーの間には、「言葉の壁」があると思います。その「壁」を埋めるためということで、パンガシナ YMCA とケソン YMCA に所属するワークキャンパーが、今回のワークに参加していました。

2日間、僕はワークに参加したのですが、日本人ワークキャンパー、フィリピン人ワークキャンパー、アエタと一緒に話をしている光景はあまり見受けられませんでした。

僕は、2001年夏に参加したはじめてのワークキャンプで、あまりアエタと話をすることができませんでした、というよりも正確には、しませんでした。ひとつはまだタガログを勉強して間もないころで、アエタとうまくコミュニケーションをとることができなかった、という言葉の問題があります。しかしそれよりももっと重大な理由は、寝食を共にし、多くの時間を一緒に過ごした英語の通じるフィリピン人ワークキャンパーとの方が、話やすく居心地がよかったです。もし僕が個人的な旅で、フィリピン人ワークキャンパーに会いに来たということであれば、かれらと一緒に英語で語り、楽しい時間を過ごすことは何の問題もなかったと思います。しかし僕は、アエタの地でワークをするキャンパーとしてプログラムに参加しました。

「アエタの地で、かれらの理解できない英語でフィリピン人ワークキャンパーと仲良く語りあう『私』」

その光景はアエタにとって、決して愉快的ものではなかった、と思います。その知らない間に自分の冒した「他者への気配りのなさ」を僕は帰って後、大学の先生の指摘を受けながら、引きずって考えてきました。「私」の「居心地のよさ」にもみ消される形で、自分でも気づかぬうちに「私」から忘れ去られていたアエタがいたという事実と向き合うことは、とても恥ずかしい「私」と向き合うことでした。

僕がついたころには、すでに日本人キャンパーとフィリピン人キャンパーは仲良くなっていました。日本人キャンパーもフィリピン人キャンパーもとても親切で、遅れて到着し

た僕ですが、みんなすぐに受け入れてくれました。僕もすぐに自分の「位置」を確保することができ、楽しく冗談を飛ばしながらみんなと話し始めることができました。

信頼関係がそのように固まりつつある中で、サブリーナとパシンから聞いたことをみんなにいうことは、友情に水をさすことではないか、また僕をすぐに快く受け入れてくれたのに、「アエタとあまり話していないよね」とキャンパーたちに問題を投げかけてしまうことで、みんなはどう思うのだろう、とディスカッションを始める前にたじろいでいました。

たしかにサブリーナとパシンの2人の「声」以外は直接、僕は聞いていません。また、たった2日間しかワークに参加していない僕の観察自体、一部に限定されたものかもしれませんが、しかしアエタの「必要とするワーク」を行うためであれ、僕たちはかれらの地を訪れている者たちです。「お邪魔すること」、「気を遣わせること」を覚悟で、笑いながら足を踏み入れることがマナーだと思います。

アエタの「声」に回答できるように静かに耳を傾けること、そしてアエタがワークについて、僕たちについて何を感じているのか、をキャンパー全員で受けとめ共有することが、かれらの厚意に対するお返しではないか、と思います。

ディスカッションの中で、キャンパーたちみんなと問題共有できたことは、とても貴重な時間であったと思います。「アエタの人たちがワークについて、キャンパーたちについて何を感じているのか、僕たちは知らないのではないか」、「なぜ、何をしに、何のために、僕たちキャンパーはここにいるのか」、「このワークの意義は何だろうか」、それらはどれも僕たちキャンパーが「ワーク」の、そしてそれぞれが「私」の根本を振り返り、問い直すための論点です。議論が白熱し、多くのキャンパーが、ディスカッションを閉じたあとも居座り、日付が変わっても語り続けました。メイアンが僕に「Wala tayong pinuntahan - 解決策が見つからない」と漏らしていましたが、その通りだと思います。与えられた「ワーク」を機械的にこなしていくのではなく、「私」と他のキャンパーたち、アエタたちとの関係を考慮しながら「私」のしていることを問い直してみる、その「ワーク」は見過ごされがちな「何か」を少しでも拾い上げていくことではないか、と思います。

その翌日の午前、アエタとフィリピン人キャンパー、日本人キャンパーが笑いながら話している光景をたくさん見かけました。お昼過ぎに僕と数人のキャンパーがサムソンの家を訪ね、サムソン一家や親戚と駄弁っていたのですが、いつのまにか他のキャンパーや三上さんも来てくれて、一緒に輪を作りながら話しました。いろいろ質問や返答も交わされるなかで、サムソンが「アエタはみんな、このワークに感謝している」と言ってくれました。

最後にこのディスカッションの反省点を書いて、この文章を締めくくりたいと思います。それはディスカッションに、アエタの視点が欠けていた、ということです。YMCA の宿泊施設に泊まっているのは、日本人キャンパーとフィリピン人キャンパーだけです。ですからこのディスカッションは「アエタのいないところで、アエタについて語っていた」といことを、僕たちキャンパーは考えなくてはならない、と思います。

これは一キャンパーとしての僕の提案ですが、数人の若者のアエタにお願いして、一緒に YMCA の宿泊施設に泊まってもらう、そして議論、評価会に参加してもらう、ということです。もちろんなぜアエタに来てもらうのか、事前にその詳細を説明し理解してもらわなくてはなりません。しかし次回以降の、ワークキャンプの改善点として YMCA 側に考慮していただければ、幸いです。